

日本中國學會報 第七十集
二〇一八年十月六日 發行 拔刷

三國志物語の成長

『三國志平話』成立前後から毛宗崗本『三國志演義』まで

大塚秀高

三國志物語の成長

『三國志平話』成立前後から毛宗崗本『三國志演義』まで

大塚 秀 高

まえがき

史實が中核にあっても、それを長篇の歴史物語とするには、にがりにあたるなんらかの物語をそこに導入し、それにより一貫性を持たせる必要があった。このために選ばれた物語が、『水滸傳』の場合は「瘟神の物語」であり、『三國志演義』（以下では「演義」と略する）の場合は「斬首龍の物語」であった。かくして宋江（と李逵）は毒酒を仰ぎ、關羽は斬首されることになった。否、斬首された關羽が『演義』第一の英雄に拔擢されたというべきであろう。とはいえ斬首された武將なら枚擧に遑がなかつたはずで、そのなかから關羽が選ばれるにあつてはそれなりの理由があつたはずである。巷間で語られた三國志物語の關羽は、天帝のいわれなき封水に抗い、早魃に苦しむ人々を救済せんとして天帝に斬首された龍神の下凡轉生者とされる。斬首龍の物語を三國志物語に導入する構想は、實在の關羽（と關平）が臨沮で斬られている（斬羽及子平于臨沮）ことに靈感を得たものであるうが、おそらくそれだけが理由ではなかつたはずである。ちなみに、正史の『三國志』は「斬」とし斬首とはしないが、首が曹操に送りつけられてお

り、それとみて問題はあるまい。もちろん歴史物語から歴史小説に昇華した『演義』が關羽の前身を善良な龍神と明言するはずはなかつた。そもそも關羽を天帝に斬首され下凡轉生した龍神とする文獻は、普靜に援けられて關道遠の家に下凡轉生した雷首山澤の龍神とする『歷代神仙通鑑』卷九などを除き、二十世紀以降に蒐集された民間故事集所収のものが大半であつた。だが、『演義』に先行する『三國志平話』（以下では「平話」と略する）が關羽の死を「困于山嶺、落後數日、大雨降。後說吳魏兩國官員至荊州、言聖歸天」と記し、雨に乗じて歸天したと示唆する以上、當時すでに關羽の死を（下凡）龍の歸天とする言説があつたとみてさしかえはあるまい。そもそも『演義』には各種の版本があり、それらの歴史物語からの昇華の度合はさまざまであつた。とはいえ宋江の死が『水滸傳』の最終回においてであつたのに對し、關羽の死は二十四卷本の『演義』の卷一六においてであつて、このあと『演義』はまだまだ續くことになっている點は見逃せない。『水滸傳』と異なり、『演義』には關連する史書が多數あつたし、『平話』という、關羽死後の三國鼎立の物語を記す先例があつたから、孔明を關羽に代わる主人公として物語を續けることにさしたる支障はなかつたかもし

れない(ちなみに、『平話』は巻下第十四葉以降をそれに充てているに過ぎず、三國鼎立の物語を十分に展開させているわけではない)。ひるがえって『演義』の前半を陰で支えた斬首龍の物語であるが、關羽の死後、果たして『演義』とは無縁の存在となつてしまつたのか。これが以下に論ずる問題を考え始めたきつかけである。

一 『水滸傳』の構成

迂遠であるが、上記のテーマにつき論ずるに先立ち、『三國志演義』と、これと同時に長篇小説としての體裁を整えたと思われる『水滸傳』につき、その構成を比較してみたい。兩者の構成には類似點が多々あり、一方が他方をモデルに構成された可能性があるからである。

『水滸傳』には大きく分け、百回本、百二十回本、七十回本の三種類があるが、高儒の『百川書志』巻六・史の野史に「三國志通俗演義二百四卷(四の後に十が脱落か)」とならび「忠義水滸傳一百卷」が著録されるように、なかでは百卷(百回)本が最も古く成立したとみなせる。『百川書志』著録本は現存しないし、晁琛の『寶文堂書目』卷中・子雜に「三國通俗演義武定板」とともに著録される「水滸傳武定板」も現存しないため、以下では容與堂一百卷一百回本『忠義水滸傳』(以下で單に『水滸傳』という場合はこの容與堂本をさす)により、その構成を考えることにしたい。

金聖歎が百回本の第七十二回以降を「腰斬」し第一回を「楔子」としたのは、第七十一回の「忠義堂石碣受天文梁山泊英雄排座次」が、第一回の「張天師祈禳瘟疫洪太尉誤走妖魔」を承けたものとみたらであり、その認識は誤りではない。この部分、『宣和遺事』前集にみえる、花石綱の搬運に始まり、「宋江統率三十六將、往朝東岳、賽

取金炉心願」に終わる、宋江を主人公とする一連の物語を縦糸に、宋代の盛り場で「小説」の演目となつていた青面獸楊志、花和尚魯智深、行者武松といった三十六將に数えられる好漢おのおのの發跡變泰譚を横糸として巧みに組み合わされた、『水滸傳』において最も早期に成立していたとみなせる部分で、梁山泊物語とでもいえる部分である(以下、この部分を第一部分とよぶ)。

第七十二回以降第八十二回までは宋江が徽宗皇帝の招安を受けるまでの部分で、『宣和遺事』では先の引用に續き、「朝廷不奈何、只得出榜招諭宋江等。有那元帥姓張名叔夜的、是世代將門之子、前來招誘；宋江和那三十六人歸順宋朝、各受武功大夫誥勅、分注諸路巡檢使去也」と記される部分であつて、第一部分で使い洩らした「小説」や雜劇などで演ぜられていた物語を用いて構成したと推察される部分である(以下、第二部分とよぶ)。

次の第八十三回以降第九十回までは征遼を述べた部分である。『宣和遺事』は上引部分に續け、「因此三路之寇悉得平定」とするのみで、征遼への言及はない(もちろん百二十回本で挿増された征田虎、征王慶への言及もない)。よつて『水滸傳』の征遼部分は『宣和遺事』以後の創作に係る部分とみなせる。征遼がそうした部分であることは、根據とともに宮崎市定が夙に明らかにしている(以下、第三部分とよぶ)。

續く第九十一回以降第九十九回までは征方臘を述べた部分であつて、『宣和遺事』の「後遣宋江收方臘有功、封節度使」とある部分を膨らませたものということになる。先行研究によれば、反亂を起こした押司の宋江と方臘の亂を討伐した宋江は同姓同名の別人というから、同姓同名を幸いに、梁山泊の宋江に征方臘をさせる構想が『宣和遺事』の頃には實現されていたとみられる(以下、第四部分とよぶ)。

そもそも梁山泊の宋江にしても、朝廷に招安された事實などなかつたから、この第四部分の構想が芽生えた時點で梁山泊物語は大變身を遂げ、兩者をスムーズに連結すべく、『宣和遺事』の徽宗が李師師のもとに遊んだとする記載をもとに第二部分が追加されたのかもしれない。

最後の第百回は、張天師を召し寄せ都の瘟疫を祈禳させるべく龍虎山に遣わされた洪太尉が「誤走」させたとする妖魔（梁山泊の好漢、なかならず公明を字とする宋江（と李逵）を再度封じ込めるために設けられた回であり、第一回と首尾をなす部分といえる。第一回の決着は、第七十一回で天から好漢の座位を記した石碑が降ることについているようにみえ、この第百回は屋上屋の印象がないわけではないが、石碑の降下は公明の仕組んだ、いわば偽の結末であつたから、本来の結末はそれと別につけられる必要があつた。ではその結末とは何か。關羽が歸天し、母を救うべく地獄の門を打ち破つた（打城）目連が、その混亂に紛れて地獄から逃げ出しこの世に轉生した八百萬の餓鬼を再度地獄に收監すべく、黃巢に生まれ變つて八百萬の人を殺したように、妖魔即好漢をこの世から抹殺することがそれであつた。そのことを悟つた宋江は、純粹な瘟神ではあるが宋江の言うことはよく聽く李逵を道連れに毒酒を仰いだのである。すなわち第百回は第一回の眞の結末だったのである。ちなみに、第四部分が梁山泊物語に加わつたことが『水滸傳』の大變身のきつかけとなつたのは、そこに瘟神の物語が含まれていたからであつて、その發想の萌芽と同時に、宋江には公明の字と黒三郎の別名が與えられたとおぼしい。按ずるに、そのきつかけとなつたのは李逵の渾名黒旋風であつたろう。かくて、第三十八回以降におかれる、潯陽江を舞臺とする「白龍廟小聚會」とよばれ

る物語が、宋江と李逵の特殊な關係をあらかじめ讀者に知らしめるべく『水滸傳』に組込まれることになつたのであろう（以下、最後の第百回を第五部分とよぶ）。

以上、『水滸傳』の構成につき簡述したが、果たして『三國志演義』の構成にこれと似たところがあるのか。次節ではこの點について考えてみたい。

二 『三國志演義』の構成

『演義』の版本は『水滸傳』以上に多數あるが、大きく分ければ二十四卷系諸本、二十卷繁本系諸本、二十卷簡本系諸本の三系統となろう。この三系統のいずれが今は失われた原本（筆者の考える原本は、「羅貫中」の原本といわんより、以上の三系統に分かれる以前の祖本というに近い。ちなみに、この祖本以前の『演義』の狀況が推定できる場合、「原本」でそれを示すことにするが、多くの場合、兩者は區別しがたい）に近いのか、それぞれの系統に屬する版本のなかではいずれの版本のどの部分に原本の姿が留められているか、さらにはその重要な指針となつてゐる關索説話、花關索説話の原本における有無や細かい字句の相違をめぐつて議論が闘わされてゐるわけであるが、『演義』の場合、『水滸傳』の「挿増田虎王慶」や七十回腰斬に匹敵する大規模な構成の相違はなく（細部の相違については必要に応じて後述する）、すべて二百四十則（ないしこれに對應する百二十四）からなるから、『水滸傳』との比較の便を考慮し、とりあえず二十四卷系諸本の百二十回本で、清朝後期において一世を風靡した觀のある毛宗崗本により回数を示し、引用については同じく二十四卷系諸本の最古の完本（分則本）である嘉靖本（嘉靖壬午序本、張尙德本）によりその構成を紹介することにしたい（なお、毛宗崗本の

回目には對應する分則本の則目とまま相違がみられる。よつて以下では必要な場合も毛宗崗本の回目ではなく嘉靖本の則目を示すことにした。

『演義』の第一部分は、第一回から關羽の麥城での死と玉泉山での顯聖までを記す、劉關張の桃園結義に始まり、天帝に斬首され人間に下凡した龍神である（既述のごとく、『演義』ではその痕跡はほとんど拭い去られている）關羽が再度斬首され怨靈になりかかったおり、その下凡轉生を援けた普靜に一喝され頓悟するまでの部分（第七十六回）である。生まれる時は別でも死ぬときはいつしよとの桃園の結義が果たされなかつたことが述べられる部分といつてもよからう。『水滸傳』の第一部分に相當し、三國志物語でも早く成立した部分を含む部分といえよう。ここでは假にこの部分を劉關張の物語の前半とよんでおく。

第二の部分は、關羽の死を承け、桃園で結義した残る二人、張飛、劉備がその義を守らんとして無念の死を遂げるまでの部分で、第八十五回ぐらゐまでの部分がこれにあたる。呂蒙に祟つた關羽の怨念を呉から魏へ逸らすため、孫權が關羽の首を曹操に送りつける。それをみた曹操が驚死し、曹丕が後繼となつた。かくてすでに名目のみの存在であつた漢が滅び、一舉に魏吳蜀の三國が誕生する。それまでの蜀と吳の同盟は關羽の死によつて破綻し、出兵した劉備が呉に敗れて白帝城で死をむかえたため、劉禪がこれに代わつて即位し、孔明が丞相となつた。こうして「三結義」に始まる劉關張の物語は終幕をむかえ、三國鼎立の物語が幕を開けることとなつた。ちなみに、玉泉山で普靜に一喝され鎮まつたはずの關羽の怨靈が呂蒙を取り殺し曹操を驚死させては「頓悟」したとはいえない。これは、先の一喝で一應の結末を迎えるはずの斬首龍の物語の影響下にある劉關張の物語の前半を、そ

の後半、さらには三國鼎立の物語に繋げるための措置であつたらう（ちなみに『三國志平話』は關羽が怨靈になつたとも、呂蒙が取り殺され曹操が驚死したともしない）。

第三の部分は、第八十七回から第九十一回までの、孔明による南蠻征伐部分であり、『水滸傳』でいえば第三の征遼部分に相當する。そもそも『水滸傳』の征遼や『演義』の南蠻征伐は、白話の長篇小説、とりわけいわゆる靈怪小説にとつて必要な要素であつた孤魂超度の役割を擔う部分として、それぞれの主要部分が成立した後に追加挿入または増補されたものとおぼしい。征遼や南蠻征伐がそうしたものである證據としては、兩者のいづれにおいても、それまでに登場していた主要登場人物が死なないことに加え、『演義』では瀘水のほとりで、『水滸傳』の征田虎・征王慶を増補した志傳評林本の「魏州城宋江祭諸將石羊関孫安擒勇士」では魏州で、戰没將兵を慰靈する行爲がおこなわれていることが挙げられる。『西遊記』の最終第百回に玄奘が長安の雁塔寺で水陸大會をおこなう場面があるように、孤魂超度の目的を果たすには、先立つて西天、遼、南蠻といった異界へゆき、そこで妖怪や異國、異族を討ち果たす必要があつた。こうした國內外への征伐のモチーフは地獄めぐりのモチーフが姿をかえたものといえよう（ちなみに『平話』は瀘水のほとりでの祭儀に觸れない）。

第四の部分は、第九十二回から第一百七回までの孔明による北伐部分であり、『水滸傳』では征方臘部分に相當する。ただし孔明の北伐は史實であつて、宋江の征方臘が同姓同名の別人、節度使宋江の功績をいわば横取りしてなつたものであるのとは異なる。ちなみに、孔明の南蠻征伐も宋江の征遼とは異なり史實であつた。だから、兩者の構成の類似が、一方が他方の構成を念頭に創作されたものであつたのな

ら、『水滸傳』が『演義』に倣つたのであつて、その逆はありえまい。必ずや、孔明の北伐をモデルに宋江の征方臘が生まれ、北伐に先立つ南蠻征伐を念頭に、南北を逆にして征遼が企圖されたに相違ない。次節以降ではこの點をさらに考察することとするが、それに先立ち、『演義』の掉尾を飾る第五の部分につき簡述しておきたい。

『演義』の第一百八回以降の最後の部分は、三國が晉によつて統一される部分であり、第二部分以降に本格化する三國鼎立の物語を締め括る部分であるが、その前身は、『平話』では桃園結義の前に置かれながら『演義』では省かれた司馬仲相陰司斷獄の物語と首尾呼應するものであつたろう。『平話』における司馬仲相陰司斷獄の物語は、『水滸傳』なら第一回と第一百回に相當する、冒頭と掉尾を飾る額縁部分であつたのだが、三國志物語が史實に強く惹きつけられ始めた時点で、その前半部分については『演義』から省かれたのであろう。「演義」を銘打つには相應しからずと判断されたのではあるまいか。

三 關羽の死後の斬首龍の物語

『三國志演義』成立前後の魏延の扱ひの變遷

以上に論じたごとく、關羽を斬首龍の下凡轉生者とする物語は、關羽が麥城で捉われ、斬首され「歸天」したことで結末を迎えるわけだが、關羽死後の『演義』が斬首龍の物語と完全に縁を切つてしまつたのかというと、そうではなかつたようである。

關羽死後の『演義』には、關羽にかわりこれとそっくりな相貌の人物が登場している（正しくは豫めそれ以前に登場しているのであるが、それが原本の状況を正しく反映しているものかには議論の餘地がある）。魏延である^①。魏延が初登場する際、『演義』（卷九「劉玄德敗走江陵」）は、

その相貌を「身長九尺。面如重棗、目似朗星、如關雲長模樣、武藝獨魁、江表義陽人也。姓魏、名延、字文長」と記している（『三國志平話』には魏延の相貌に關する記述はない）。しかも、魏延は苦境にあつた劉備の側に率先して付き、關羽に引き立てられていた。以下に引く『演義』卷一一「黃忠魏延獻長沙」がその場面である。

忽然一將揮刀殺人、砍散刀手、救起黃忠、大叫曰：黃漢升乃長沙之保障、韓玄殘暴不仁、輕賢重色、今殺漢升、是殺長沙百姓也。願隨者便來。百姓視之、其人面如重棗、目若朗星、器宇軒昂、貌類非俗、乃似關將、義陽人也。姓魏、名延、字文長。本人自襄陽趕劉玄德不着、故來長沙、依傍韓玄。玄怪魏延傲慢少禮、不肯重用、屈沈於此。……玄德大喜黃忠、待之甚厚。雲長引魏延、亦言其功、玄德敬之。

ところが孔明は魏延を「大不義」と罵り、斬り捨てるよう強硬に主張した。上引に續く部分、ならびに次則の「孫仲謀合淝大戰」の冒頭を引こう。

孔明勃然曰：韓玄與汝無讐、殺之、乃大不義也。人人效此、必懷異心。喝令刀斧手、推下斬之。簇下魏延、未知性命如何。且聽下回分解。

玄德見斬魏延、急命止之、問孔明曰：誅降殺順、大不義也。魏延乃有功無罪之人、何故殺之。孔明曰：食其祿而殺其主、是不忠也。居其土而獻其地、是不義也。吾觀魏延腦後有反骨、久後必反、故先斬之、以絕禍根。後史官有詩曰：……玄德曰：若斬此人、非安漢上之計也。力勸免之。孔明指魏延曰：吾今饒汝性命。汝可盡忠報主、

勿生異心。若有異心、早做早取汝頭、晚做晚取汝頭。魏延喏喏連聲而退。

孔明は、主を殺しその領地を献上するのは不忠不義であり、後頭部に反骨があるから後日必ず叛く。生かしておくとは禍根を残すから斬つてしまえと主張したのである。劉備のとりなしに、一度は矛を収めた孔明だったが、その後も祕かに魏延を亡き者にする機会を窺っていた。以上の點については葉逢春本も表現の相違はあつても同様であるから、兩者の祖本も魏延を關羽似の反骨の持ち主としていたとみられる。嘉靖本はそれをより強調したに過ぎない。

ひるがえつて『平話』であるが、個々の情節の有無や順序、内容に『演義』との相違があるのは當然であるが、魏延は夏口の場面には登場せず、黃忠の守備する金陵郡の攻防戦に初めて登場していた(巻下)。もちろん反骨への言及などなかった。『演義』の以上二箇所の魏延の相貌が關羽のそれに類するとする記述であるが、齊裕焜によれば、余象斗本、湯賓尹本は嘉靖本と同様だが、劉龍田喬山堂本は卷一一にはなく、朱鼎臣本、黃正甫本は雙方になく、毛宗崗本は相貌の描寫はあつても關羽そっくりとはしないという。だが葉逢春本には兩者がともに存する。したがつて、この部分の挿入ないし削除(あるいは挿入後に削除された)の時期については慎重に検討する必要がある。とはいへ『平話』には情節そのものがなく、『演義』でも顔見世程度の登場である卷九部分については、「原本」に魏延は登場していなかつたとみてよいのではあるまいか。魏延を卷九に登場させ、そこで關羽との相貌の類似をひとまず印象付け、卷一一でそれに加え反骨に言及する趣向は原本から始まつた可能性が高そうである(この趣向が導入された

最初の版本を以下では原本とよぶ)。

ひるがえつて、嘉靖本で魏延が孔明に目の敵にされているのはなぜか。孔明の死後、蜀軍が撤退するおり、魏延が私怨により楊儀を攻撃したことは史實であるが、趙雲などよりよほど軍功があつた實在の魏延が、かくもあしざまに描かれるのはなぜか。思うに、そのことと孔明が魏延を反骨の持主と指弾したことは連動しているのではないかとよぶ)は、孔明の英知を喧傳することにひたすら努めたようだ。この結果、讀者は、原本の編者の仕掛けに目を眩まされ、反骨の存在を一も二もなく信じ込まされ、ひいては孔明の魏延を除かんとする企に違和感を抱かないようになっていたに相違ない。

嘉靖本卷二一の「孔明火燒木柵寨」には、孔明が上方谷で司馬懿父子もろとも魏延を燒き殺そうとする場面がある。以下にそれを引こう(丸括弧内は割注)。

〔司馬〕懿曰：此必是屯糧之所。遂大驅士卒皆入谷中。懿忽見虜房中盡是乾柴、前面魏延勒馬橫刀而立。懿大駭。乃與二子曰：倘有蜀兵斷其谷口、如之奈何。急退兵時、只聽得喊聲大震、山上火把一齊丟將下来、燒斷谷口。懿大驚無措。將兵斂在一處、山上火箭射下。地雷一齊突出、草房內乾柴皆着。魏延望後谷中而走、只見谷口壘斷、仰天長嘆曰：吾今休矣。司馬懿見火光甚急、乃下馬、抱二子大哭曰：吾父子斷死於此處矣。……

却說孔明收兵、回到渭南大寨、安營已畢、魏延告曰：馬岱將葫蘆谷後口壘斷、若非天降大雨、延同五百軍皆燒死谷內(此乃孔明欲將司馬懿・魏延皆要燒死、不想天降大雨、二人得生。後孔明死時、遺

計與馬岱、將延斬之。

孔明の一舉兩得の計に天は味方せず、大雨が降り火薬が發火しなかつたため、魏延はもとより司馬懿親子も命拾ひし、蜀の命運はここに決したわけであるが、この部分には注目される點がある。それぞれに表現に些少の相違はあるにせよ、「司馬懿見火光甚急、乃下馬、抱二子大哭曰：吾父子斷死於此處矣」の直前にみえる「魏延望後谷中而走、只見谷口壘斷、仰天長嘆曰：吾今休矣」の一文がないという點で、葉逢春本、李漁本、喬山堂本、黃正甫本等は共通するというのがそれである（もちろん最後の割注もない）。しからば嘉靖本に先行する『演義』では、孔明の魏延への無體な仕打ちも（また過度な英知も）嘉靖本ほど突出して描かれてはいなかつた（上記の一文については嘉靖本が追加したことになろう。だが、この一文を残す李卓吾評本も、この行爲に對しては「孔明定非王道中人、勿論其他、即謀害魏延一事、豈正人所為。如魏延有罪、不妨明正其罪、何与司馬父子一等視之也」と評でその非を鳴らしているというし、毛宗崗本はこの一文を削除したのみならず、のちに魏延から九死に一生を得たといわれた際の孔明の釋明部分を、ことごとく削除してしまつてゐるという¹³⁾。讀者のかんばしくない反應に配慮してのことではなかつたか。

魏延は關羽に瓜ふたつとされるが、『平話』は關羽に反骨があつたとはいわない。しからば、魏延は原本の編者により、反骨をもつた關羽に改めて形象されたことにならう。とはいへ、關羽の性格にはもとも傍若無人で依怙地なところがあつた、それが關羽の魅力でもあつた。加えて、反骨はいざ知らず、權力者（曹操や孫權がその代表）に容易に頭を垂れない反骨精神なら誰にも負けることはなかつたろう。だか

ら、吳の孫權から娘を息子の嫁にと望まれた際、その申し出を受けることが蜀の戰略に適う（とわかつていた）にも關わらず、「吾乃龍虎之子、豈嫁種瓜之孫」（『平話』卷下）とにべもなく拒絶し、吳が荊州に進攻するきつかけをつくつてしまひ、結局蜀が荊州を、自身は首を失う結果を出來させてしまつた。客觀的にみれば、關羽は蜀にとつては大罪人であつた。とはいへ、關羽は劉備、張飛と桃園結義をした閥柄であつたし、宋代にはすでに時の皇帝から王位を贈られるほど人氣が高まつてもいたから、『平話』にせよ『演義』にせよ、正面からその傲慢な行爲を非難することはもはやできなかつたろう。そこで關羽の死後、これにかわる、これとそっくりな相貌と性格の替身を創作し、その人物に思うさま筆誅を加えることにした。それが魏延であつた。否、創作とするのは正しくなからう。實在の人物であり、孔明の死後に叛いて殺された魏延に目をつけ、これを關羽そっくりの人物に仕立て上げたといふべきであらう。

『演義』の魏延は、自らの功績を鼻にかけ、孔明の死後は當然自分が跡目を繼ぐものと思ひ込んでいた。そんな魏延にかねてから不信の目を向けていた孔明は、死の直前、姜維と楊儀に指示し、魏延の叛亂に豫め備えていた。『平話』にも、孔明の死が目前に迫つてゐる狀況を察知しておしつけてきた魏延に、孔明自ら死後は帥を任せると傳える一方、姜維と楊儀に別命を授け、これを先君の神位の前で斬らせる場面があつた。以下にその場面を引こう。

陌（驀）听得寨門前鬧、姜維出探、見魏延來、言：軍師有事、我管軍師印信。軍師不語、叫魏延至、言曰：三十年前、荊州因取江下四郡、將軍方可降漢、於国累建大功。吾死、魏延為帥（帥）懸印。

魏延喜而出。又数日、叫楊儀、姜維、趙雲衆太尉近前、軍師哭而告曰：吾死、可將骨殖歸川。衆人皆泣下。當夜、軍師扶着一軍、左手把印、右手提劍、披頭、點一盞灯、用水一盆、黑雞子一个、下在盆中、壓住將星。武侯帰天。姜維掛起先君神、斬了魏延。

だが『平話』の時點では魏延を關羽の替身とする構想はいまだ熟していなかったとみるべきであり、上引の部分は陳壽の『三國志』の記述を多少敷衍したものであつて、そうした構想が確固としたものになつたのは、やはり原本の段階であつたとおぼしい。だが、魏延を惡役に仕立て上げようとするあまり、孔明が邪惡な存在になつてしまつては元も子もなくなつてしまふ。毛宗崗本がかつて挿入されたものを削除したゆえんであろう。毛宗崗が意識したか否かは不明だが、物語が小説に變身する際、取るべくして取られた、物語の痕跡を消し去ろうとする營爲の然らしめるところだつたといつてよいのではあるまいか。そうした營爲はおそらく何度かに互つてなされたに違いない。最初は原本から嘉靖本に至るいづれかの段階で、關羽の前身とその下凡轉生の經緯を語る部分の削除がなされ、次に嘉靖本第二版の段階で、關羽の死の場面を記す嘉靖本初版の卷一六第十九葉の削除と第十八葉の修正がなされ、『演義』版本變遷史の掉尾を飾る毛宗崗本では、關羽と魏延の相貌の類似と孔明の魏延への惡意をもつた執着に關わる描寫の削除が行われたのである（身長も九尺から八尺となつた）。

魯迅は孔明の形象を「多智而近妖」とした。赤壁の戦いで東南の風を吹かせたり、曹操が滅びる運命にないと知り、わざと關羽に華陽道を守らせ恩を返させたり、星に祈つて自らの壽命を延ばそうとしたりしたからであるが、妖といわんよりは、物語の世界で關羽の前身であ

る善龍を斬首した天帝に近いとすべきであつた。孔明が天帝であるなら、『平話』が孔明の死を、關羽以外では唯一「帰天」と表現しているのも、『演義』で魏延が七星燈の主燈を「撲滅」し孔明の延命の望みを絶つたのも納得がゆくといふものである。

四 原本『三國志演義』から嘉靖本へ

現存の『演義』の構成やそこに仄見える痕跡からみて、原本『演義』は現存本と同様、否それ以上に、前半の劉關張の物語とそれ以降の三國鼎立の物語との對照がはつきりしていたようである。

現存最古の完本である嘉靖本が魏延を關羽そっくりな相貌の人物として形象するのは、劉關張の物語を三國鼎立の物語にスムーズに續けるため、反骨の持主としたのは、實在の魏延の末路と平仄を合わせ、魏延の命を執念深く狙う孔明の行爲に正統性を與えるためであつたろうが、『演義』の讀者には不評で、後日修正を重ねざるをえなくなつたようだ。

孔明が赤壁の戦いの際に風を祭つたことや、關羽が曹操への借りを返せるよう取り計らう情節は『平話』にもみえる（南蠻征伐のおりも「持劔祭風」しているが、これはおそらく赤壁祭風の焼き直しであろう）から、孔明を神のごとき英知の持主に描くのは『演義』に始まつたわけではなかつた。だが『平話』が當時の三國志物語を忠實に再現しているわけではないとしても、先に引いた死を目前にした孔明の行爲は、魏延の將星を「壓住」して姜維に斬らせたとはい讀めず、魏延が孔明の延命の望みを打ち砕いたように讀めまい。そもそも『平話』には魏延の反骨への言及がなかつたし、孔明が上方谷で司馬懿父子もろとも魏延を焼き殺そうとする情節もなかつた。しからば、孔明と魏延の對抗

軸はいまだ『平話』には導入されていなかったはずである。おそらく、斬首龍の物語はこの段階では二人の關係に投影されていなかったに相違ない。

按ずるに、孔明と魏延の對抗軸は『平話』から嘉靖本までの間の『演義』に導入され、それを強調せんがため、魏延の登場場面が前半に追加され、相貌の關羽との類似が強調されることになったのであろう。

言うまでもなく、關羽との相貌の類似を強調することは、魏延が關羽の替身、言い換えれば斬首龍の二代目であることを示そうとしたためであつた。魏延を關羽の替身にしたのは、關羽を天上の皇帝である天帝への反抗者（の下凡轉生者）とするわけにはゆかなかつたためであらう。かくて『演義』の前半からは關羽が斬首龍の下凡轉生者であることを示す記述が削除された。思うに、この削除は嘉靖本の初版の段階でなされたのではあるまいか。だがそれが不十分とわかり、追加の削除をせざるをえなくなつた。それが嘉靖本の第二版だったのであらう。嘉靖本が關羽を斬首龍の下凡轉生者として描くことをかくも嫌つたということは、逆に、關羽を斬首龍の下凡轉生者とする構想が、嘉靖本が修正対象とした『演義』にはいまだ存在していたことの逆證明とならう。

ひるがえつて『演義』の第二部分であるが、第一部分との間に、既述のごとく關羽の頓悟をめぐる矛盾が存在していた。この部分、第一部分に導入された斬首龍の物語が關羽の死により一應の結末をみた後、その怨靈に呂蒙や曹操を取り殺させることにして、斬首龍の物語が組み込まれたそこまでの劉關張の物語（の前半）を、やや強引に本來の歴史物語に繋げようとした部分とみたい。『平話』の存在に鑑みれば、この第二部分、原本はもとより「原本」にもあつたとみるのが

至當であらう。よつて、筆者としては、如上の修正を試みた者は「原本」の編者であつたとみておきたい。ちなみにこの部分、『水滸傳』では梁山泊に百八人の好漢が勢揃いして以降、李師師の傳手をえて招安されるまでの部分に相當する。劍神關羽や張飛、呂布といった英雄の物語をほぼ使い果たした後の、物語としては強弩の末とでもいふべき部分であつた。

『演義』の後半、第三部分以降の三國鼎立の物語部分は、史實に依據する部分が多く、加えて關羽、張飛、呂布などに匹敵する英雄が不在となつたため面白味に缺ける部分であるが、斬首龍の物語に代わる物語を導入することはせず、『三國志』や『資治通鑑綱目』、さらには『蜀漢本末』などの史書に依據し、要所にこれらからの引用をちりばめる方針により膨らまされた部分とみたい。とはいへ「七擒孟獲」の個々具體的な情節などは新たに創作せざるをえず、魏延を關羽の替身として斬首龍の物語を再利用することもこれと並行しておこなわれたのではないかとみられる。瀘水のほとりでの戦没將士慰靈の場面もこの時期に導入されたのであらう。

五 關索說話と花關索說話

最後に残つた大きな問題は、關索說話、花關索說話の存否と原本の關係を如何に考えるかである。まずは花關索說話についてであるが、これは原本には存在しなかつたとみたい。花關索說話を有する二十卷繁本系諸本の源頭に立つとおぼしい葉逢春本にそれが存在しないからである。おそらく關索說話を有する、嘉靖本を除く二十四卷系諸本や二十卷簡本系諸本と差別化すべく、成化說唱詞話の『花關索傳』またはそのもとづく物語から後日導入されたものであらう。

次に關索説話についてであるが、これについては「元々は關索の活躍がもつと多く描かれていた」が「魏延、或いは馬岱に書き換えられたのではないか」という説⁽⁷⁾に魅力を感じるが、それについては『平話』における關索、魏延、馬岱の描かれ方を検討する必要がある。

『平話』の南蠻征伐で、魏延は南郡太守の雄凱（雍闓）を斬り捨て、孔明の命を受け出陣して孟獲を捕えているが（軍師令魏延出戦、蛮將大敗、捉了孟獲、關索は敗れたふりをして不韋の太守呂凱を城から誘い出す役割を與えられているに過ぎない。むしろ孔明の使者に立つた關平が、「不降又不戰、為何」「害」「你識俺軍師善能行醫」との間答後、孟獲を孔明のもとに連れてゆき、その病を治癒させた方が目立っている（關平は北伐でも活躍している）。馬岱にいたっては影も形もなかった。

そもそも『平話』で馬滕（騰）の子で馬超の弟とされている馬大（岱）であるが、兄で五虎將に封ぜられた馬超に比し影の薄い存在であつて、馬滕が曹操に殺されたおりに馬超とともにこれと戦いはしたが、劉備の入川に従つて以降、馬超と異なりまつたく表にでてきていない。『平話』は一應歴史物語の體裁を整えているが、前半の劉關張の物語部分については張飛や關羽の發跡變泰譚の要素が強かつたし、後半の三國鼎立の物語も、この二人に匹敵するほどの大看板こそいなかつたが、中小の英雄の物語を利用して肉付けしていよう。それゆえ、ある部分では大活躍する人物であつても、それ以外ではまつたく姿をみせないこともあつたのではなかつたか。とはいへ歴史小説となつた『演義』ともなるとそれでは困る。ひとたび配下となつた史書にでてくるほどの武將ならその後も活躍させたいし、それが無理ならせめて名だけでも出したいと編者が考えたとしても無理からぬことではあるまいか。その際に狙い目となるのが、物語のみに登場する關索のような人物で

あつたらうことは容易に想像が付く。だから先の説には魅力があるのである。

そもそも「演義」を銘打とうと「志傳」を銘打とうと、原本の段階ともなつた『演義』が、史書に影もない人物を新たに導入したり復活させたりするとは思えない（逆に削除することはあつたらう）。王府が関わつており、關羽を斬首龍の下凡轉生者、すなわち天帝への反抗者とすることを徹底的に嫌つた嘉靖本とあればなおさらだつたらう。

よつて嘉靖本に關索説話がなく、花關索説話を後補したとおぼしい二十卷繁本系諸本を除く他の版本に關索説話が存在していることが、嘉靖本以前の『演義』に關索説話があつたことの逆證明になると筆者は考えている。ただし二十卷繁本系諸本最古の葉逢春本に關索説話が存在しない點は注目される。關索説話の削除が兩者の共通の祖本の段階でなされたのではないなら、嘉靖本と葉逢春本でそれが別々におこなわれたことになるからである。この點は版本の系統分岐を考える際の要石になるはずであるが、ここではその指摘にとどめ、以後の研究は專家に待つこととしたい。なお、筆者は（葉逢春本を除く）二十卷繁本系諸本については、物語の世界に強く引き戻された版本であり、そこには福建という地域ならびに出版人余象斗の人となりが大きく関わつていと豫想しているのだが、この點についても機を改めて論ずることとしたい。

六 『三國志平話』成立前後の三國志物語

ここまで、『三國志演義』を五つの部分に分け、その成立の順序を検討してきたが、それぞれの部分内の個々の情節においても成立時期の前後はあつたはずだし、かつて存在した情節が姿を消し、これに替

わる新たな情節が導入されることもあつたらう。以下ではこの點を『三國志平話』によつて考察してゆくのであるが、『平話』、『演義』とも三國志物語という大樹の果實ではあつても成立時期が異なるし、系統が異なることも考えられる。よつて、以下は論證というより可能性の提示というに近いものであることを豫めお断りしておく。

上圖下文本の『平話』の上圖には、そこに描かれる場面を三字から八字で短く説明した、四角な枠で圍つた部分が存在する(以下ではこれを畫題とよぶ)。畫題は基本的に見開きの圖(原裝の胡蝶装による)の右端上部に置かれるが、例外的に左端上部に置かれるものなどもある。これに加え、下文部分にも上圖の畫題と類同の文字を白抜きにした部分が存在する。この白抜き文字は本文における見出しともいふべきものであつて、前後の本文と基本的に獨立した存在であるが、なかには本文と同化しているもの、挿入する位置を誤つたものもある(以下ではこれを則題とよぶ)。則題の置かれる位置は對應する畫題を有する上圖の下文の場合が多いが、ずれる場合もあつた。否、正しくは上圖が下文とずれるというべきであらう。當該及び前後の情節の繁簡(長短)により、對應する上圖を前後の葉にずらさざるをえなくなつてしまつたのである。

按ずるに、三國志物語を含め、歴史物語が當初から當該の時期の全體を語るものだったとは思えない。必ずやその精彩を放つ情節を中心に語るものだったはずである。しからば、三國志物語の場合、三國のあらゆるクライマックスともいえる「赤壁鏖兵」や、關羽の活躍を描く「関公千里独行(五關斬將)」などがそこに含まれていた蓋然性は高いが、それ以外の部分が當初から存在していたかには疑問符がつく。

ひるがえつて、全相平話五種のうち、下文に則題が存するものは『三國志平話』と『七國春秋平話後集』のみで、『武王伐紂平話』、『秦併六國平話』、『前漢書平話續集』にはそれがみえない。平話ごとに則題の有無に相違があり、則題のある平話においてもそれが偏在している事實をどのように考えるべきか(『七國春秋平話後集』は全卷に互りほぼ萬遍なく則題が存在しているが、『三國志平話』ではそうなっていない。別表に兩者の則題を畫題とともに示したので参照されたい)。筆者はそれを、現在五つの全相平話として残されている歴史物語、ならびに各々の平話を構成する、則題によつて示される情節單位ごとの履歴を示すもの、言い換えれば、當時巷間で語られていた事實の有無、流傳時期の長短を示すものとみている。假にこの見立てのとおりなら、則題の偏在は當該歴史物語のもつた歴史語りの偏在を、則題の不在は同じく歴史語りの不在を示すことになるはずである。以下ではこの考えのもと、『平話』刊行以前の三國志語り(三國志物語)の様相につき考察してみたい。

『三國志平話』上中下三卷は各卷二十三葉からなるが、卷上の中盤までの十五葉ほどには則題がみられない。しからばこの部分には『平話』成立以前には語られていなかった、言い換えれば『平話』が編纂される際に新作(ないし別途補充)された可能性があらうことになる。さすれば卷上で以前から語られていた部分はそれ以降の「董卓弄權」あたりから呂布と張飛の爭戰を経て、呂布が白門で斬られる部分のみであつて、それに先立つ、黄巾の亂に始まり桃園結義を経て玄德が平原縣丞として善政を施すまでの部分には『平話』の段階で新たに創作された(少なくとも出自が異なる)可能性があらうことになるであらう(なお、筆者は冒頭の司馬仲相陰司斷獄部分については、「説三分」として三國史

語りとは別のかたちで語られていたものにもとづく可能性を考えている。

巻中の前半は「刺顔良」から「千里独行」、「斬蔡陽」、「古城聚義」へと、關羽を主人公とする物語が續く。後半は「三謁諸葛」から趙雲と張飛が活躍する長坂橋、さらには「赤壁鏖兵」へ續き、最後は呉夫人の歸國で終わっている。則題からみる限り、巻中には當時語られていた部分が多かったようであるが、劉備に關係する、たとえば壇溪や荊王墓などに關わる部分には則題がないから、新たに創作された可能性がありそうである。巻中には劉備を蜀の建國者たるに相應しい人品の持主とすべく新たな情節が増補されたのではあるまいか。「赤壁鏖兵」をめぐる情節が異常に簡略である點については、三卷のすべてを等しく二十三葉とするためと、劉備關係の新たな情節追加の煽りを喰い、周知の情節として簡略化の憂き目をみた可能性を考えたい。

續いて巻下であるが、則題が存在しない前半四分の一ほどに新作の可能性がありそうである。これに續く部分に「黃忠斬馬守忠」と「皇叔封五虎將」なる則題がみえるが、巻下のみならず、巻上、中のいづれにも五虎將の一員である馬超を擧げる則題がないのは、やむをえないとはいえない不釣合いである。おそらくそれゆえに、巻下の冒頭部分に馬超とその父馬騰（騰）に關する情節（畫題では「曹操殺馬騰」と「馬超敗曹公」）が書き足されたのではあるまいか。さらに、關羽の單刀會に關する則題がないことも注目される。この部分も雜劇（ないしは戲文）から改變挿入された可能性があろう。加えて劉備の死から劉禪の即位に至る部分にも新作の可能性があろう。英雄の死は、關羽の場合がそうだったように、物語には馴染まなかつたからである。

以上に述べた則題の偏在に鑑みるなら、六朝期夙に存在していた三國志語りにもとづくはずの『平話』ではあつても、紙幅の等しい三卷

本として刊行するためには相當な増補ならびに修改が必要だったと結論せざるをえない（ちなみに『平話』に先行する、増補以前の原『平話』には每卷三分の一ないしそれ以上の増補が加えられたことになろう）。しからば、いまだ歴史物語が十分成長していなかつた時期を對象とする平話を刊行するには、それ以上に大幅な増補、否、創作が必要とされなくてはである。このように考える時、全相平話刊行以前に、その基礎をなす歴史語りが存在（ないし相應に發達）していたとみなしてよいものは三國志語りと七國春秋語りのみであり、『三國志平話』と『七國春秋平話後集』以外の平話には、その刊行時點で新たに追加された要素が多く含まれているはずだということになろう。

むすび

ここで、ここまで断片的に觸れてきた、『三國志平話』以前から毛宗崗本に至る三國志物語の變遷につき、もう一度整理して述べておこう。

そのかみ三國志物語は「說三分」を額縁とし、張飛（と呂布）、關羽、趙雲、黃忠、龐統などを主人公とする個別の物語に、諸葛孔明指揮下でおこなわれた赤壁の戰、南蠻征伐、北伐の情節をまじえることで形をなしたが、『三國志平話』として刊行するに當たり、後の三國鼎立の物語への移行を念頭に、前半部においては劉備の存在感を強めることを目的に、巻上には桃園結義や平原丞としての劉備の善政を描く情節を、巻中には壇溪、哭荊王墓の情節などを書き加えて劉關張の物語に相應しいものとし、巻下には五虎將の一人の馬超に獨立した物語を持たせるなどしたようだ（關索の名も一箇所みえ、後日關平の地位を奪つ

た可能性も考えられるが、當時の三國志語りでの關索の役割については不明とせざるをえない。

三國志物語は『平話』以降も變化を續け、その一部の情節については三國志物語から排除されることになったが、逆に新しく加わったものもあつたし、新たな構想によつて語り直されることもあつた。後者の代表的なものが關羽を斬首龍の下凡轉生者とするもので(ちなみに、あまたの斬首された武將から關羽が斬首龍の下凡轉生者に選ばれたのは、關羽が戰鬪においてではなく、孫權を痛罵して斬首されたからであろう)、これにより三國志物語は歴史物語、さらには歴史小説となることができたのだが、『水滸傳』の宋江の場合と異なり、關羽は正史に傳が立つほどの著名人であつたため、その死の時期を都合よく變えることは不可能だつたし、三國志物語を關羽の死で終わらせることはましてできなかったから、關羽の死後の三國鼎立の物語、就中南蠻征伐部分での關索活躍の場面を増やし、關羽の不在を凌ごうと考えたのではなかつたか。

だが南方に縁が深く、實在の人物でもない關索を北伐で活躍させることはさすがにできなかったから、次の段階では三國鼎立の物語全般を通じて一定程度存在感を持つ人物が求められたに相違ない。かくて白羽の矢が立てられた人物が魏延であり、魏延の反骨を持った關羽化、關索の南蠻征伐における活躍の一部魏延のそれへの轉用がなされたのであろう。

魏延を關羽の替身とし、斬首龍の物語まで再度持ち出したものの、魏延のみではいかにもインパクトに欠ける。このため魏延を執念深くつけ狙う孔明が對抗軸として擔ぎ出され、その天帝のごとき英知がより強調されることとなった。魏延の相貌の關羽との類似がより強調さ

れるようになったのもこの頃であろう。

嘉靖本は、原本の魏延を關羽の替身として強調する構想については受け入れたものの、魏延の相貌と關羽のそれとの類似を強調するあまり關羽の前身が天帝に抗つて斬首された龍神であることがあからさまになることを嫌い、關羽の前身に關する物語の削除を徹底しておこなつた。だが嘉靖本(と葉逢春本)以外の『三國志演義』は關索說話という物語のしつぽを程度の差こそあれ持ち續けたし、花關索說話を導入して先祖がえりするものもあつた。李卓吾評本や毛宗崗本は批評という形で歴史物語から歴史小説へ脱却する道を追求しようとしたようだが、嘉靖本(と葉逢春本)以上の成果を挙げたとは言ひ難いようである。

注

- (1) 「瘟神の物語」については拙論「瘟神の物語―宋江の字はなぜ公明なのか―」(『宋代の規範と習俗』所收、汲古書院、一九九五・十)を参照されたい。
- (2) 「斬首龍の物語」については拙論「斬首龍の物語」(『埼玉大學紀要 教養學部』三一―所收、一九九六・三)を参照されたい。
- (3) 宮崎市定「水滸傳の傷痕」(『東方學』六所收、一九五三・七)。後に「水滸傳的傷痕―現行本成立過程の分析」と改題され『アジア史研究』第四東洋史研究會、一九六四・十二)、『宮崎市定全集』一二水滸傳(岩波書店、一九九二・二)に收められた。
- (4) 宮崎市定の「宋江は二人いたか」(『東方學』三四所收、一九六七・六)及び『水滸傳 虚構のなかの史實』第二章「二人の宋江」(中央公論社、一九七二・八)、高島俊男『水滸傳の世界』(大修館書店、一九八七・十)

- などを参照されたい。ちなみに筆者は「水滸説話について―『宣和遺事』を端緒として―」（『中國古典小説研究動態』二所收、一九八八・十）において、梁山泊物語における宋江を三人の宋江が合體したものとみる説を提唱し、「劍神の物語（下）―關羽を中心として―」（『埼玉大學紀要 教養學部』三二二所收、一九九七・三）の第六節第三項「三人の宋江」でこれを深化させ、その三人を、ごく初期の物語において劍神として形象されていた宋江、梁山泊で反亂をおこした實在の宋江（好漢宋江）、閻婆惜殺しの押司「宋江」とした。なお宮崎の「宋江は二人いたか」は『アジア史論考』下（朝日新聞社一九七六・五）に收められたのち、『水滸傳―虚構のなかの史實』とともに『宮崎市定全集』一二水滸傳に收められた。
- (5) 『東都事略』卷百三・侯蒙傳によれば、「宋江：不若赦過招降、使討方臘以自贖」と上書し徽宗に「忠臣」と褒められた侯蒙は東平府に赴任する以前に死んでいるし、知海州の張叔夜は宋江を「破」し（『三朝北盟會編』卷八八）、宋江は張叔夜に「降」したという（『東都事略』卷百八・張叔夜傳）。
- (6) 拙論「小説と物語―劍神説話を端緒として」（『中國古典小説研究動態』四所收、一九九〇・十）の二十一「下凡神の顔色―黃巢と鍾馗」、ならびにこれを改稿した注（4）の拙論「劍神の物語（下）―關羽を中心として―」の第九節第二項「下凡神の物語―黃巢、目連、李存孝」を参照されたい。
- (7) 『演義』の版本を論じた論著は多数あるが、以下ではその代表として中川諭『『三國志演義』版本の研究』（汲古書院、一九九八・十二）を、最新の研究として井口千雪『三國志演義成立史の研究』（汲古書院、二〇一六・三）を挙げておきたい。
- (8) 孤魂超度のモチーフについては拙論「中國通俗小説の書目と提要―所謂靈怪小説の概念、講史章回小説の舊本と新本に言及しつつ―」（『中國

- 古典小説研究動態』二所收、一九八八・十）の十四「靈怪小説の本質―孤魂超度―から十八「地獄めぐりの變容」までにおいて論じている。
- (9) 司馬仲相陰司斷獄の物語については拙論「關羽と劉淵―關羽像の成立過程―」（『東洋文化研究所紀要』一三四所收、一九九七・三）、ならびに「漢の物語から唐の物語へ―『三國志平話』をめぐって」（『神奈川大學中國語學科創設十周年記念論集中國通俗文藝への視座―新シノロジー・文學篇』所收、東方書店、一九九八・三）を参照されたい。
- (10) 關羽と魏延の相貌の類似に注目して詳しく論じた論文としては、齊裕焜「鏡像關係：魏延與關羽」（『文學遺產』二〇〇五・一）所收、二〇〇五・一）が挙げられる。
- (11) 注（10）の「鏡像關係：魏延與關羽」による。
- (12) 沈伯俊「最も愛される武將―『三國志演義』の趙雲像」（『三國志研究』一一所收、二〇一六・九）。
- (13) 以上は注（10）の「鏡像關係：魏延與關羽」による。
- (14) 關羽の死の場面を記す嘉靖本の初版と第二版の相違については、中川諭「嘉靖本『三國志演義』における「關羽最後」の場面について」（『文化』五四・一一所收、一九九〇・九）、注（6）の拙論「小説と物語―劍神説話を端緒として」の十六「C―劍神は死に際に劍を水神に返還する關羽と伍子胥、ならびにこれを改稿した注（4）の拙論「劍神の物語（下）―關羽を中心として―」の第八節第一項「關羽の場合」を参照されたい。
- (15) 『中國小説史略』第十四篇「元明傳來之講史（上）」にみえる。
- (16) 『演義』の第三部分、南蠻征伐の部分への「蜀漢本末」の利用については、井口千雪『『三國志演義』と『蜀漢本末』』（『和漢語文研究』一〇所收、二〇一二・十一）に詳しい。この論文は後に『『三國志演義』と『蜀漢本末』―南蠻王孟獲討伐を中心に―』と改題され、井口の『三國志演義成立史の研究』の第六章に收められた。

- (17) 『花關索傳の研究』（汲古書院、一九八九・二）の金文京「解説」、ならびに井口千雪「關索說話に關する考察」（『和漢語文研究』一一所收、二〇一三・十一）による。後者は井口の『三國志演義成立史の研究』の第四章に收められた。
- (18) 井口の注(16)の論文による。
- (19) 上圖の圍み文字にはそこに描かれた人物の姓名を記すものもあるが、ここでは論じない。
- (20) 下文の白抜き文字には本文に引かれる主として韻文部分を目立たせる役割を持つとおぼしきものもあるが、これについてもここでは論じない。
- (21) 金文京『三國志演義の世界』（東方書店、一九九三・十、増補版、二〇一〇・五）を参照されたい。

附記

引用部分は別表も含め、日本語（日本）、中國語（繁體字、臺灣）、中國語（簡體字、中國）の範圍内で最も原文に近い文字をあてた。この範圍を越える場合は繁體字によっている。

別表1：『三國志平話』畫題・則題對照一覽表

卷葉	畫題	則題	卷葉	畫題	則題	卷葉	畫題	則題
上1	漢帝賞春		中1	漢獻帝賞玄德因張		下1	龐統謁玄德	
2	天差仲相作陰君		2	曹操勸吉平	曹操勸吉平	2	張飛刺蔣雄	
3	仲相斷陰間公事			閔公襲車胄	閔公襲車胄	3	孔明引衆現(見)玄德	
4	孫季究得天書		3	趙雲見玄德		4	曹操殺馬騰	
5	黃巾叛		4	閔公刺顏良	閔公刺顏良	5	馬超敗曹公	
6	桃園結義1		5	曹公贈雲長袍		6	玄德符江會劉璋	
7	桃園結義2		6	雲長千里獨行	曹公贈袍	7	落(維)城虎統中箭	落(維)城射龐統
8	張飛見黃巾			閔公新蔡陽	閔公新蔡陽	8	孔明說降張益	張飛議攝(義備)敵顏
9	破黃巾		7	閔公新蔡陽	閔公新蔡陽	9	封五虎將	龐統助計
10	得勝班師		8	古城聚義	古城聚義			黃忠斬馬守忠
11	張飛殺太守		9	先主跳檀(壇)溪				皇叔封五虎將
12	張飛鞭督郵		10	三顧孔明	三顧諸葛	10	閔公單刀會	
13	玄德作平原縣丞				諸葛出庵	11	黃忠斬夏侯淵	黃忠斬夏侯淵
14	玄德平原德政及民		11	孔明下山	軍師使計	12	張飛捉于昝	張飛捉于昝
15	董卓弄權		12	玄德黃荆王墓				諸葛使計退曹操
16	三戰呂布	三戰呂布	13	趙雲抱太子	趙雲抱太子	13	閔公斬龐德佐	曹操斬太子
17	王允獻董卓貂蟬	張飛獨戰呂布			張飛拒水断桥			閔公斬龐德佐
18	呂布刺董卓	呂布投玄德	14	張飛拒橋退卒				閔公水滸七軍
19	張飛碎袁襲	張飛碎袁襲	15	孔明殺曹使		14	閔公水滸于禁軍	
		曹豹飲徐州	16	魯肅引孔明說周瑜	曹操拜拜幹為師	15	先主托孔明在太子	
20	張飛三出小沛	張飛三出小沛	17	黃蓋詐降蔣幹		16	劉禪即位	
21	張飛見曹操		18	赤壁鏖兵	赤壁鏖兵	17	孔明七縱七擒	諸葛七擒孟獲
22	水浸下邳擒呂布	侯成盜馬			孔明祭風	18	孔明木牛流馬	諸葛造木牛流馬
		張飛捉呂布	19	黃蓋放火		19	孔明斬馬謖	
23	曹操斬陳宮	曹操斬陳宮	20	玄德黃鶴樓私酒		20	孔明百箭射張郃	諸葛斬馬謖(謖)
		白門斬呂布	21	曹操射周瑜				百箭射殺張合(部)
			22	孔明班師入荊州		21	孔明出師	
			22	吳夫人欲殺玄德	吳夫人回面	22	秋風五丈原	西上秋風五丈原(原)
			23	吳夫人回面		23	將星墜孔明營	

別表2：『七國春秋平話後集』畫題・則題對照一覽表

卷葉	畫題	則題	卷葉	畫題	則題	卷葉	畫題	則題
上1	孟子見齊宣王	孟子至齊	中1	樂毅破齊	樂毅破齊	下1	袁達戰石丙	
2	燕王傳位与丞相之為口	燕王傳位与丞相	2	燕王入齊報仇	齊王出走	2	孫子困樂毅	孫子拿樂毅
		齊兵伐燕	3	齊王出走	燕王入齊報仇	3	樂毅請黃柏(伯)楊圃齊	孫子放樂毅
3	齊人伐燕	齊兵伐燕得勝	4	樂毅會涑齒擒齊王	楚遣涑齒教齊			其河戰
4	燕人立昭王	鄒(鄒)忌助孫子奪			樂毅會涑齒破齊	4	迷魂陣困孫子四人	迷魂陣困孫子四人
		孫子回朝	5	固存太子哭齊王	涑齒捉齊王	5	齊國宣鬼谷教孫子	齊國宣鬼谷教孫子
		燕国立昭王			樂毅令石丙殺齊王	6	鬼谷下山	鬼谷下山
5	鄒(鄒)堅弒齊宣王	鄒(鄒)堅弒齊王			齊臣王嬭自經死	7	獨狐(狐)角入迷魂陣	鬼谷至齊寨
		鄒(鄒)堅立齊潛王	6	孫子反問燕王召回樂毅	固存太子哭齊王	8	鬼谷說伯陽	鬼谷說伯陽
6	齊王貶二公子	孫子詐死			青龍景口(救)固存太子	9	鬼谷擒畢昌	鬼谷戰魏兵
7	四国合兵困齊	四国困齊	7	燕王詔回樂毅	孫子下山	10	漁叟送陰書与鬼谷	鬼谷索張兗陰書
8	蘇代請孫子救齊	蘇代請孫子救齊			孫子反問燕王召回樂毅	11	破迷魂陣	鬼谷得陰書
9	孫子請四国回兵	蘇代見孫子	8	王孫賈射茶涑齒	立齊襄王			趙兵助齊
		四国回兵	9	田單火牛陣破燕兵	王孫賈殺涑齒	12	孫子出迷魂陣大戰	破迷魂陣
10	孫子遇樂毅	樂毅下山	10	齊襄王婦媼(媼)城	齊襄王婦媼(媼)城	13	伯曠樂毅投降鬼谷	七国混戰1
		燕国築黃金臺招賢			孫子再請樂毅回齊			七国混戰2
11	口(燕)王築黃金臺招賢	鄒(鄒)衍刺齊至燕	11	樂毅再圖齊	孫子歸齊國	14	四国順齊	四国混奉
		樂毅投燕			樂毅再圖齊			衆仙歸山
12	燕王拜樂毅伐齊	燕王拜樂毅為帥伐齊			孫子說樂毅			
13	樂毅與伐齊	燕国伐齊	12	孫子說樂毅	孫子与樂毅開陣			
14	燕齊大戰	燕齊大戰	13	石丙追孫子	袁達戰石丙			
			14	孫樂開陣				